事例3　千葉県　柏市立柏第三小学校

データを活用して教育活動の課題を捉え、「根拠（エビデンス）に基づく」カリマネを推進

千葉県柏市立柏第三小学校のカリマネの特色は、学力調査を始めとした各種データを分析し、教育活動の成果や課題を捉えることから出発している点だ。分析結果を教職員と共有し、改善策を検討して、学校全体で教育活動の向上に取り組んでいる。

◎1948（昭和23）年開校。市中心部に位置する大規模校。教育目標に「人間性豊かで、目標に向かって努力を続ける強い心と体力を持った児童の育成」を掲げる。

校長　小久保武司先生
児童数　1,043人
学級数　37学級（うち特別支援学級5）
電話　04-7167-3161
URL　http://www.dai3-e.kashiwa.ed.jp/

校長
小久保武司
こくぼ・たけし
千葉県公立中学校校長、柏市立教育研究所統括リーダー、千葉県総合教育センター研修企画部部長等を経て、2018年度から現職。

カリマネの推進方針

データで現状を可視化し、改善の方向性を明確にする

千葉県柏市立柏第三小学校では、根拠（エビデンス）に基づくカリマネを推進している。学力を始めとした教育活動の成果や課題を数値によって可視化し、より効果的な改善策を検討するねらいがある。小久保武司校長は、次のように説明する。

「働き方改革の考え方に基づき、教員の多忙化解消に努めています。ただ、教育活動の成果は、必ずしも目に見えるものだけとは限らず、単なる業務削減では、本来必要なことまで削ってしまうことになりかねません。そこで、各種データを活用し、それぞれの教育活動がどのような効果を持つのかを確認しながら指導改善に取り組んでいます」

カリマネに取り組む上では、これまで当たり前と考えて行ってきた教育活動や様々な業務について、「効率」と「能率」の観点から再検討している。

「子どもにかかわりのない事務作業などは、効率を重視し、教員の負担軽減や時間短縮に努めています。一方で、授業や学校行事など、子どもの成長に直接かかわる教育活動に関しては、時間や労力の削減を前提とはせず、まず能率を上げることで、同じ時間でも成果を高めることを重視し、その成果をデータで確認しながら更なる改善策を検討しています」（小久保校長）

データに基づいた指導改善

定着度が高い学級の指導を共有し、学力の底上げを図る

指導改善には、文部科学省の「全国学力・学習状況調査」、柏市が実施する「柏市学力・学習状況調査」に加え、学校独自に行うテストの結果も活用している。

例えば、算数の単元テストを行ってから3か月後に類似問題のテストを実施し、定着度を調査している。小学校は定期考査がなく、単元テストの結果を活用して指導改善を行うことが多い。しかし、単元終了直後は子どもが学習内容をよく覚えているため、定着度までは分からないと考え、時間をおいて定着度を測ることにしたのだ。

すると、2018年度のある学年では、単元テストでは学級間に正答率の差はほとんど見られなかったが、3か月後の定着度調査では違いが見られた（**図1**）。定着度が高い学級の指導法を調べると、各授業の後半にまとめや振り返り学習を行っていることが分かった。そこで、2019年度は、1年生以外の学年でベネッセの「くりかえし計算ドリル」を授業後に行い、反復学習の時間を充実させることにした。

2019年度も引き続き、学年ごとに重点単元を決めて、3か月後に類似問題で定着度を測り、指導の成果を可視化する予定だ。

「定着度調査の目的は、学級間の比較ではありません。定着度が高い学級で行った指導を分析して共有したり、定着度が低い学級にどのような原因があり、どうすれば定着度が高まるのかを、他学級の指導を参考に

しながら検討したりすることにあります。実際、この結果を踏まえて、2018年度の後半はすべての担任が定着を意識して指導したところ、2月に行った定着度調査の結果では、学級間の差が改善されていました。また、学級によっては、定着度と比較して思考力や表現力など他の力の方が大きく伸びるケースも見られます。今後は、より多様なデータに着目し、指導の成果を多面的に明らかにすることを目指します」（小久保校長）

データに基づく指導改善①

学級の学力分布を意識し すべての学力層を伸ばす

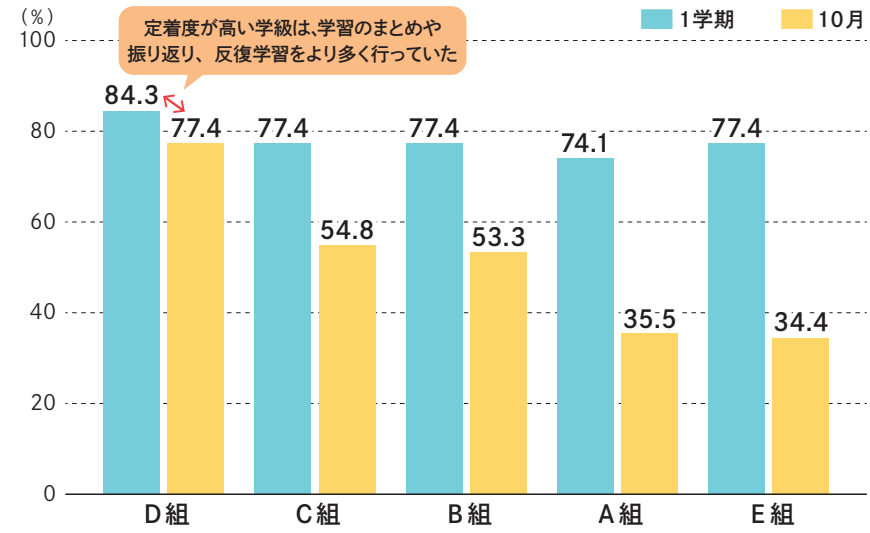
2019年度は、年度当初に各担任に学級の学力分布図を配付し、各学力層を意識した指導も始めた。「柏市学力・学習状況調査」の2017年度と2018年度の結果を比較したところ、学級によって学力の伸びに差が見られたからだ。小久保校長がそのデータを学力分布に照らし合わせて分析すると、どの学力層に焦点をあてて指導したかによって、学力の伸びに違いがあることが分かった。

「学級編制は、主に子どもの人間関係を重視して行うため、学級によって学力分布がかなり異なります。学力分布をあまり意識していない場合、その学級の中心的な学力層に向けた指導になりやすく、それが子どもの理解度に影響を及ぼします。例えば、上位層が多い学級では、中・下位層の子どもが授業についていけなかったことが分かりました。一方で、中位層が多い学級では、どの学力層もまんべんなく学力が伸びる傾向にあることに気づきました」（小久保校長）

小久保校長は、日頃から各学級の授業を見るようにしている。そうすることで、教員の指導や子どもの様子を把握できているからこそ、データ分析の切り口が得られたと語る。

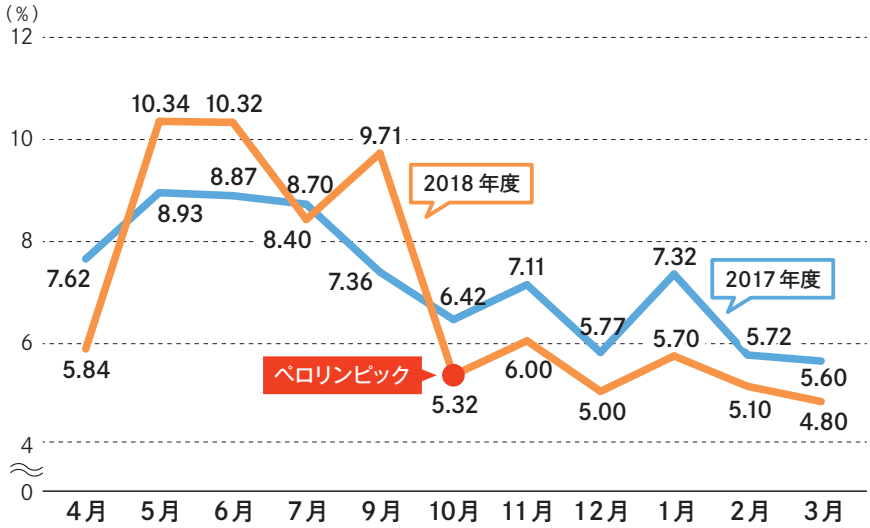
「データは客観的な事実を示してくれますが、それだけでは一面的です。教員や子どもの実際の姿を普段から把握しておくことで、データの裏に隠れた意味も読み取れると考えています」

図1 算数 学級別の正答率



＊柏第三小学校提供資料を基に編集部で作成。

図2 給食の残渣（食べ残し）率の推移（2017・18年度）



＊柏第三小学校提供資料を基に編集部で作成。

データに基づく指導改善②

全職員とデータを共有し、学校全体の意識を高める

同校では、学力以外にも様々なデータを用いてカリマネを推進している。

例えば、給食の残渣（食べ残し）率も重視するデータの1つだ。2018年度は、年度当初の残渣率が10％程度あった。そこで、子どもの健やかな成長を支えるために残渣率を減らすことを目指し、栄養教諭とともに方策を練り、給食の完食を目指す「ペロリンピック」を実施した。食事の大切さを学んだ子どもたちは、意欲的に食べるようになり、教員も意識して指導したため、年度末までに残渣率は5％程度にまで下がった（**図2**）。

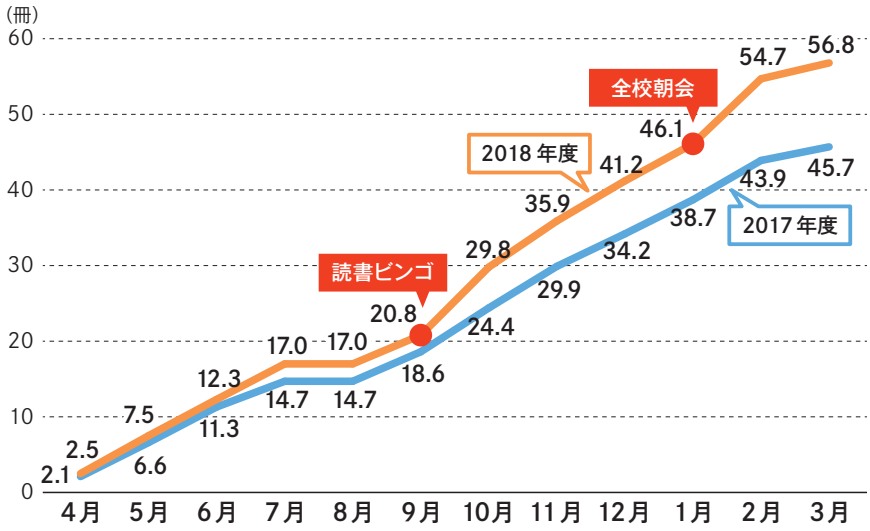
また、図書館の貸出冊数が伸び悩んでいた状態を改善しようと、2018年度の途中から借りた書籍のタイトルで表を埋める「読書ビンゴ」を実施。全校朝会でも図書の貸し出しについて話題にした。すると、子どもたちは積極的に読書をするようになり、最終的な累積貸出冊数は前年度を上回った（**図3**）。

ほかにも、校納金の徴収状況や長期欠席児童の推移、虫歯の治療率、インフルエンザの罹患（りかん）状況など、様々なデータを教職員と共有し、いかに数値を改善するか考えを出し合い、取り組みを工夫している。

「学校は、教員以外にも事務職員や図書館司書など、様々な職員が教育活動にかかわっています。学力以外のデータにも着目して課題を見いだし、改善し、その成果を目に見えるデータで表すことで、すべての教職員の意欲を高めたいと考えています」（小久保校長）

小久保校長は、全校朝会などでも各種データを示し、子どもたちにも学校の目標や課題などを伝えている。それにより、子どもたちが、自分で努力する目標を持てるようになってほしいと考えている。

図3　図書館の貸出状況の推移（1人あたりの年間の累積貸出冊数）



＊柏第三小学校提供資料を基に編集部で作成。

写真　小久保校長が指導方針とともに、様々な教育活動に関するデータ分析結果をまとめて文書化し、職員会議で共有している。

学校のチーム力を高める工夫

目標や目指す授業を共有し教員の指導力向上を支援

同校では、教員の指導力向上にも力を注いでいる。その一環として、増置教員の配置などを工夫し、全教員に週1時間以上の空き時間を設け、互見授業を促している。また、主に若手教員を対象に、教頭や教務主任が単元を通して模範授業を行っている。若手教員は、模範授業で授業展開の手法や指導技術などを学ぶほか、授業中に机間指導を丁寧に行い、担当学級の子どもがそれぞれどこでつまずいているかなどを把握して、その後の指導に生かしていく。

「若手教員には、指導力の高いベテラン教員の授業を見たいという気持ちがあります。そうした機会を多く設け、目指す授業のイメージを持てるようにすることが、指導力向上の出発点になると考えています。加えて、研修の機会が限られている講師にとっても、成長のきっかけとなっていると思います」（小久保校長）

学年がチームとして同じベクトルで指導できるよう、毎週月曜日の朝に、学年団での「学年ミーティング」も実施している。以前は、その時間に職員打ち合わせを行っていたが、週の初めに学年ごとに授業のねらいや内容、学校行事への対応などを共有する方が大切だと考え、職員打ち合わせは木曜日の放課後に行うことにした。また、月1回の職員会議でも様々なデータを共有し、全教職員で今後の指導を検討、共有している（**写真**）。

小久保校長が今注目しているのは、子どもへのアンケートを基にした学校満足度だ。自校の教育活動の総合的な成果の1つと捉えており、2018年度は前年度を上回った。

「日頃から先生方には、『教員が元気であれば、子どもも元気になる』と話していますが、データが目に見えて向上すれば、先生方にとって大きな励みになります。これからもデータに基づいて学校全体でカリマネに取り組むとともに、教育活動を担う先生方が常に笑顔で指導できる環境づくりに力を入れていきます」（小久保校長）